

リトアニアのホロコースト研究と歴史認識問題 ——ルータ・ヴァナガイテ／エフライム・ズロフ『同胞——リトア ニアのホロコースト 伏せられた歴史——』を読む——

Holocaust Studies and the Historical Consciousness in Lithuania: Reading *Mūsiškiai* by Rūta Vanagaite and Efraim Zuroff

紺谷 南

KONTANI Minami

東京外国語大学大学院博士前期課程
Tokyo University of Foreign Studies, master's student

キーワード

リトアニア ホロコースト 対独協力 歴史認識

Keywords

Lithuania; Holocaust; Collaboration; Historical Consciousness

原稿受理日：2022.10.30.

Quadrante, No.25 (2023), pp.225–236.

目次

はじめに

1. リトアニアのホロコーストに関する研究動向と 歴史認識問題

1-1. ホロコーストを巡る歴史認識問題

1-2. 研究史と近年の研究動向

2. 『同胞』の評価と位置付け

2-1. 構成と内容

2-2. 意義と批判・疑問点

おわりに

はじめに

本稿では、これまでのリトアニアのホロコースト研究と歴史認識問題の関係を踏まえながら、ルータ・ヴァナガイテ¹、エフライム・ズロフ²による共著『同胞——リトアニアのホロコースト 伏せられた歴史——（以下、『同胞』）³の書評を行う。

本題に入る前にまず、なぜ数あるホロコースト関連の書籍の中でナチス・ドイツやアウシュヴィッツを題材としたものではなくリトアニアを扱った本書を取り上げるのか、つまり、なぜ今リトアニア及び東欧のホロコーストに関する議論や研究へ目を向けることが重要なのかという点について考えてみたい。

ナチズムやホロコーストに関する書籍は、専門性の高い学術書から子ども向けの教育本まで毎年膨大な数が世界各地で出版されている。日本においてもナチズムやホロコーストに高い関心を寄せる一般読者は多く、手に取りやすい新書の刊行や外国語の研究書の翻訳などが日本人研究者によって絶えず精力的に行われている。その量は日本で出版された関連書籍を把握することさえ困難な程で、範囲を外国にまで広げれば、テーマの細分化の進行や言語的な制約も相まって、これまでのホロコース

¹ 舞台演劇評論家やジャーナリスト、文芸誌の編集者など様々な分野で活躍するリトアニア人作家。

² 米国生まれ。イスラエルのサイモン・ヴィーゼンタール・センターの現所長。また、戦後ナチの戦争犯罪者の搜索と逮捕を精力的に行ってきた人物であり、リトアニアでは「ナチ・ハンター」という名でも知られている。

³ ルータ・ヴァナガイテ／エフライム・ズロフ、重松尚訳『同胞——リトアニアのホロコースト 伏せられた歴史——』東洋書店新社、2022年。



ト研究をすべて網羅することはほぼ不可能に近い状態となっている。

しかし、そうした量的・言語的な制限を考慮したとしても、現在日本で行われている研究、又は翻訳・紹介されている書籍は、ホロコースト研究全体における近年の動向を踏まえれば大きな偏りがあるように思われる。近年の欧米におけるホロコースト研究では、ナチスのイデオロギーや世界観、政策決定過程といった「中心」への関心以上に、ホロコーストはドイツやアウシュヴィッツだけで起きたのではなく全ヨーロッパ的な事象であったとして、「周辺／現地」に重点を置いたテーマの研究が盛んである。例として、各国における占領者と被占領者の関係や現地当局／スタッフの決定権の大きさ、強制収容所や都市部以外の地方におけるユダヤ人迫害・殺害、重要なアクターとしての非ドイツ人・非ユダヤ人現地住民の行動論理などが挙げられる。こうしたホロコースト研究の「ヨーロッパ化」は、ナチス・ドイツや主要な強制収容所への学術的関心が集中したことで、これまで光が当たりにくかった地域やアクターへの研究を促進した⁴。特に、ユダヤ人絶滅政策の主要な現場であった東欧への関心はますます高まっている。また、その東欧諸国の中でも特にドイツ占領下のリトアニアでは、ナチス主導によるユダヤ人絶滅政策が他に類を見ない徹底さと迅速さで実行された。1941年から1944年のドイツ占領期に、リトアニアのユダヤ人人口の約95%にあたる約20万人のユダヤ人が殺害された。さらに、この約4分の3は1941年6月末から12月までの約5ヶ月間でユダヤ人絶滅政策の犠牲者となった。これほど

の短期間でユダヤ人大量殺害が急進化した点に着目し、リトアニアのホロコーストを、それ以降ナチスによって進められる「最終解決」の組織化と実践の分析に、重要な視座を与える事例として位置付ける研究もある⁵。

さらに、学術研究における重要性以外にもリトアニアを含む東欧を軽視すべきではない理由がある。それは、第二次世界大戦下のユダヤ人絶滅政策とそれに伴う現地住民の「協力」という過去の経験が、今日の現代社会でもいまなお激しい歴史認識・記憶をめぐる論争を誘発する極めてアクチュアルな問題だからである。社会主義体制下で独特のイデオロギー的な歴史政策を経験した東欧諸国では、西側以上に自国の「歴史」と国家の「政治」が分かちがたく絡みついており、両者は常に緊張関係にあるといえる。

このような研究動向上の大きな変化と現代社会へのアクチュアルな問題提起を含んでいるのにも関わらず、日本では依然として東欧におけるホロコーストへの関心は低く、東欧各国の通史の概説書で部分的に言及されるにとどまっている。

こうした状況の中ここ数年で、リトアニアのホロコーストを考える上で重要な書籍が日本で複数出版された。2019年出版の『ナチスから図書館を守った人たち——囚われの司書、詩人、学者の闘い』⁶はヴィルニウス・ゲットーで図書館の本の保存に奔走した「紙部隊」を扱っている。2020年、2021年には、日本人にとってなじみの深い杉原千畝の「命のヴィザ」伝説を批判的に分析した研究書が二冊相次いで刊行された⁷。

⁴ Lower, Wendy, "Holocaust Studies: The Spatial Turn.", Baranowski, Shelly, et al. (eds.), *A Companion to Nazi Germany*, Medford, 2018, p.566.

⁵ Kwiet, Konrad, "Rehearsing for Murder: The Beginning of the Final Solution in Lithuania in June 1941.", *Holocaust and Genocide Studies*, 12(1), 1998, pp.3-26.

⁶ デイヴィッド・E・フィッシュマン、羽田詩津子訳『ナチスから図書館を守った人たち——囚われの司書、詩人、学者の闘い』原書房、2019年。

⁷ シモナス・ストレルツォーバス、赤羽俊昭訳『第二次世界大戦下リトアニアの難民と杉原千畝——「命のヴィザ」の真相』明

そして、2022年には、『同胞』がリトアニア近現代史を専門とする重松尚の翻訳により出版された。本書の底本 *Mūsiškiai* は、リトアニア現地住民のホロコーストへの協力を扱った一般書で、2016年にリトアニア語の原著が、2020年には英語版⁸が出版された。これまで公の場での真剣な議論が避けられてきたホロコーストにおける自国の加害者性というテーマに、リトアニア人著者自らが取り組んだことにより、国内では刊行直後から大きな反響があった。しかし、それと同時に、政治家やメディアからの「政治的な」反発と、史料論や方法論を巡って専門家からの「学術的な」批判が殺到した⁹。本書刊行後著者ヴァナガイテは複数の知人や親戚からの関係の断絶を経験し、本書自体は出版翌年に突如販売停止に追い込まれた。

このように、リトアニア社会に大きな衝撃を与えた本書の功績は、リトアニアにおける対独・対ホロコースト協力の歴史を一般読者に紹介したというだけではない。本書は、自国の加害の歴史やホロコーストの記憶が戦後70年以上たった今日においてなお深刻な議論を巻き起こす極めてアクチュアルな問題であるということを強烈に浮き彫りにした。こうした点から、本書は研究史上の位置付けや議論の評価を綿密に検討する必要があるといえる。

以上のような背景・理由を基に、本稿は次のような構成で議論を進める。第一章では、書評の土台となる、これまでのリトアニアのホロコースト研究の動向を概観する。ここでは、学術的な歴史研究が常に国家体制や政策の介入・影響を受け、またそれに抗いながら進められてきた点を踏まえ、リトアニアのホロコーストを巡る歴史認識問題についても議論する。そして、第二章で本書『同胞』の書評を行う。ここでは、

前章での議論を踏まえながらこれまでの研究史上での位置付けや本書の新規性を検討し、ホロコースト研究という大きな流れに本書がどのように結びつけられるのかを考察したい。最後に、本稿の議論を再度簡単にまとめて結論とする。

1. リトアニアのホロコーストに関する研究動向と歴史認識問題

本章では初めに、先行研究を概観する前に、なぜ第二次世界大戦後リトアニアではナチス・ドイツ占領期の対独協力やユダヤ人絶滅政策への関与というテーマが激しい論争の場となっているのかについて、当時の政治体制や一般社会の風潮、対外関係などを踏まえながら論じ、ホロコーストをめぐる歴史認識問題の現状を考察する。次に、こうした自国の歴史と政治が複雑に絡みあっている状況下で、リトアニアのホロコーストに関してどのような歴史研究がこれまで行われてきたのか、また、研究の焦点や方法論が時代とともにどのように変遷していったのかを検討する。

1-1. ホロコーストを巡る歴史認識問題

リトアニアを含む東欧諸国がホロコーストに向き合う時に生じる困難さやその課題、リトアニアで起きたホロコーストを巡る論争や裁判、様々な組織の働きなどについては、『同胞』のズロフ執筆の章である「リトアニアとホロコースト」で詳しくまとめられている¹⁰。同章の内容を基に、各所ポイントを補いながら、リトアニアにおけるホロコーストの歴史認識問題を概観する。

東欧諸国においてホロコーストを語る際に直面する難しさの大きな要因の一つは、同章で

石書店、2020年；菅野賢治『「命のヴィザ」言説の虚構——リトアニアのユダヤ難民に何があったのか？』共和国、2021年。

⁸ Vanagaitė, Rūta/Zuroff, Efraim, *Our People: Discovering Lithuania's Hidden Holocaust*, Lanham, 2020.

⁹ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.440, 450.

¹⁰ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、pp.419-437.

も指摘されているが、第二次世界大戦後40年以上にわたるソ連の共産主義支配の下で、戦時中の経験がソ連の「大祖国戦争」史観に基づいて極度に政治化・定式化されて語られてきた点にある¹¹。1950・60年代社会主義体制期のリトアニアでも、同様の歴史叙述が支配的だった。当時、リトアニア政府当局は、多くの「ナチ協力者」や反ソ抵抗運動に加わった者を戦犯裁判で裁いたが、ソ連史観に基づき、被告らに「ソ連市民の敵」という政治的なレッテルを張り「断罪／糾弾」するばかりで、彼らの役割や動機を深く分析しようとはしなかった。

1980年代リトアニアにおいてソ連体制からの独立と民主化の機運が高まると、これまでのソ連の「大祖国戦争」史観に対立する独自の歴史観が主張されるようになる。それは、1940年6月から約1年間のソ連占領期における「反ソ分子」の逮捕及び極東への強制移住や、スターリン期の迫害・抑圧を「ジェノサイド」とみなす歴史観である¹²。この歴史観では、自国民の犠牲者性が強調され、ソ連体制化の抑圧とナチスのユダヤ人絶滅政策が「同格化」される。

特に、ソ連とナチスによる犯罪の「同格化」は、リトアニアでは「二つのジェノサイド」理論¹³と呼ばれ、ズロフもその問題性を指摘している¹⁴。なお、同理論の危うさは、「同格化」に伴うホロコーストの矮小化だけではない。それは、この理論の下では、ユダヤ人がソ連共産主義体制の「共犯者」としてみなされるため、ナチス・ドイツ占領期のリトアニア現地住民による対独協力が正当化・弁明されて説明されるという問

題である。こうした「二つのジェノサイド」理論に基づくホロコーストと対独協力の理解は多くの研究者から問題視されているが、今日依然としてリトアニア社会の公の議論の場では大きな役割を果たしている¹⁵。

1980年代後半から1990年代になると、ホロコーストや現地社会の関与についての議論や研究がより活発化していく。ただ、こうした議論の転換は、リトアニア社会の中から内発的・自省的に行われたというより、当時の国内の政治的状況や対外関係上の圧力という現実的な問題から生じたといえる。1990年の独立後リトアニアで西側陣営及びEUへの加盟が目指されるようになると、アメリカや西欧諸国からは、ホロコーストの相対化やリトアニア現地社会の対独・対ホロコースト協力の矮小化に対して大きな懸念と批判が発せられ、自国の加害の歴史に批判的に向き合うことがリトアニアに強く要求された。

こうした要求を受け国際社会での摩擦を避けるため、当時の大統領ヴァルダス・アダムクスが1998年に「リトアニアにおけるナチとソヴィエトの占領体制による犯罪評価国際委員会（以下、国際委員会）」を設立した。名称のとおり、国際委員会は、ソ連期だけでなくナチス・ドイツ占領期の戦争犯罪に関する調査と研究もその任務としている。加えて、中等教育の教師や生徒を対象とした教育啓蒙活動や記念・PR活動などにも取り組んでいる¹⁶。

しかし、上記のような進展がある一方で、国際委員会の構造そのものやホロコーストの研

¹¹ 同上、p.420.

¹² 梶さやか「第3章 リトアニア——ジェノサイド・センターと国際委員会」橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房、2017年、p.41.

¹³ Dieckmann, Christoph, *Deutsche Besatzungspolitik in Litauen 1941-1944*, Göttingen, 2016[2011], S16; Katz, Dovid, "The Extraordinary Recent History of Holocaust Studies in Lithuania.", *Dapim: Studies on the Holocaust*, 31(3), 2017, p.286.

¹⁴ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.428.

¹⁵ Dieckmann, a.a.O., S.17.

¹⁶ 国際委員会の組織構成や活動内容、その重点の変遷などは、梶の前掲論文に詳しい。

究方針に対して批判的な意見も存在している。ズロフも『同胞』内で、同委員会が「二つのジェノサイド」理論を支持している側面があると批判する¹⁷。国外のユダヤ系団体からは、ソ連とナチズムの犯罪を並置させて調査する国際委員会の方針を、ナチズムによるホロコーストと共産主義体制の「混同」だとして、批判の声が上がった¹⁸。

さらに、アメリカの研究者マーティン・ディーン¹⁹は、リトアニア含めバルト諸国の国際委員会では、ナチズムの犯罪が、ソ連の占領と強制追放という大きな枠組みの内部で調査されているにすぎないと批判する²⁰。このようなアプローチ方法では、ユダヤ人絶滅政策への現地社会の関与が、単にその直前に起きたソ連による占領・抑圧への「反応／報復」としてのみ理解されてしまうという。ここに先述した「二つのジェノサイド」理論の問題点が見て取れる。ディーンは、対独協力の問題が自国民の行動を正当化する弁明的な説明に還元されてしまうことで、「協力者」の多様な動機や行動論理の説明の可能性を消してしまっていると指摘する²¹。ズロフもその名を挙げている、ユダヤ研究者ドヴィッド・カツは、こうした歴史解釈を持つ国際委員会は「ナショナリズム的な歴史修正主義」において一定の役割を果たしてきたと厳しく非難している²²。

以上が、戦後のソ連型社会主義体制期から

独立後現在に至るまでのリトアニアにおけるホロコーストに対する歴史観とその変遷及び問題点であった。次節では、具体的な研究を取り上げつつ、研究の焦点・傾向の変遷について論じる。

1-2. 研究史と近年の研究動向

前節で論じたような歴史認識問題がありながら、リトアニア国内外の多くの歴史家や研究者たちは偏った認識に基づく歴史理解の克服に取り組んできた。

まず、戦後リトアニア社会で初めて公にナチスのユダヤ人絶滅政策におけるリトアニア住民の関与を主張したのは、『同胞』でも言及されている、詩人であり文献学者のトマス・ヴェンツロヴァである²³。彼は1970年代にエッセイ「ユダヤ人とリトアニア人」²⁴で、1941年に「ユダヤ人はドイツ人だけではなくリトアニア人によっても殺された」²⁵と明確に述べ、リトアニア社会は自国の罪と加害の歴史について語る義務があることを強調した。しかし、彼のような、反ユダヤ主義的な歴史理解に対する批判と自国の加害者性への自己批判的な態度は、当時の国内の世論においても学術界においても圧倒的少数派であった。依然としてソ連型の歴史観と犠牲者心理の影響が強かった1970・80年代には、本格的な歴史研究が盛り上がることはなかった。

¹⁷ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.435.

¹⁸ 梶、前掲論文、p.48.

¹⁹ ウクライナとベラルーシを中心とした東欧の対独協力について重要な研究を多数行っている。主要な著書に Dean, Martin, *Collaboration in the Holocaust: Crimes of the Local Police in Belorussia and Ukraine, 1941-44*, New York, 2000. がある。

²⁰ Dean, Martin, "Local Collaboration in the Holocaust in Eastern Europe.", Stone, Dan(ed.), *The Historiography of the Holocaust*, Palgrave Macmillan, 2005, p.124.

²¹ Ibid. p.124.

²² Katz, op.cit., p.286., ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.436.

²³ 同上、p.18 又は p.449.

²⁴ Venclova, Tomas, "Jews and Lithuanians.", *Forms of Hope: Essays*, New York, 1999, pp.43-51. (リトアニア語で書かれたオリジナル "Žydai ir Lietuviai" はサミズダート雑誌『ソ連のユダヤ人 (Evrei v SSSR)』の付録 "Tarbut" に掲載。) 本稿は、Levinson, Joseph(ed.), *The Shoah (Holocaust) in Lithuania*, Vilnius, 2006, pp.443-450. に掲載されていたものを参照。

²⁵ Levinson, op.cit., p.443.

その後1980年代後半・1990年代になると、前節で論じた政府のホロコーストへの取り組み方の変化に呼応するように、国内でも史料に基づく実証的な歴史研究が活発になる。こうしたリトアニアの歴史学における新たな潮流の原因は、ドイツの歴史家クリストフ・ディークマンによると、①リトアニアの完全な独立の達成（によるソ連史観からの脱却）、②ソ連崩壊による元社会主義体制諸国の文書館の公開、③歴史家の世代交代（による若手の研究者の登場）にあるという²⁶。

その中でも重要な研究を残したリトアニア人歴史家として、ヴァレンティナス・ブランディシャウスカスとアルーナス・ブブニースが挙げられる。ブランディシャウスカスは、1941年ドイツの進軍に合わせソ連に対して行われたリトアニアの六月蜂起を主導したリトアニア人行動主義戦線（Litauische Aktivistenfront, Lietuvos Aktyvistų Frontas、以下LAF）及びこの時期設立されたリトアニア臨時政府に関する研究を行った²⁷。このテーマについては、『同胞』の第三章「私たちの同胞——政治家たち」で詳しく取り上げられているが、彼の大きな功績は、これまで国内で、反ソ抵抗運動を率いた「英雄」や国家再独立に尽力した機関として肯定的に評価されてきたLAFと臨時政府を、文書史料に基づいて、両組織の反ユダヤ主義的性格やナチス・ドイツ当局との結びつきを実証的に明らかにした点である。

アルーナス・ブブニースは国際委員会のナチス担当小委員会のメンバーを務めており、今日に至るまでリトアニアのホロコーストやナチス・

ドイツの占領政策について多くの研究を行っている²⁸。特に、リトアニア補助警察大隊の活動とユダヤ人大量殺害における各部隊の役割に関する詳細な分析は、少数の個人だけでなく、リトアニアの現地組織がホロコーストに深く関与していたことを明らかにした²⁹。

さらに、国内の研究者だけでなくアメリカに移住した歴史家サウリウス・スジエデリスもリトアニアのホロコースト研究における先駆的研究者である。『同胞』第七章では、ヴァナガイテによるスジエデリスのインタビューがまとめられ、現地住民による対独協力や反ユダヤ主義の影響、今日の歴史認識の現状などに関するスジエデリスの見解を読むことができる。彼の代表的な研究として、国際委員会の下でディークマンとの共同執筆で発表された『1941年夏と秋におけるリトアニア・ユダヤ人の迫害と大量殺害』³⁰が挙げられる。そこでは、ユダヤ人に対する迫害が、6月22日のドイツ軍進駐にあわせて各地で起きた散発的なポグロムや暴力から、晩夏から秋にかけての集中的なユダヤ人大量殺害へと急進化していく過程が、リトアニアの文書史料とナチス・ドイツ側の公式文書に基づいて詳細に論じられている。

また、リトアニアのホロコースト研究は国内における歴史認識の変化だけでなく、海外のホロコースト研究の動向にも大きな影響を受け、外国の研究者による学術的貢献も無視できない。これまではユダヤ人絶滅政策が一つの独立した事象として分析されることが多かったが、他の政策領域との関係性の中で大量殺戮を捉える研究が新たに主流になっている。そうした

²⁶ Dieckmann, *a.a.O.*, S.22.

²⁷ Brandišauskas, Valentinas, “The June Uprising of 1941.”, *Lithuanian Historical Studies* 3, 1998, pp.49-72.

²⁸ 例えば Bubnys, Arūnas, “The Holocaust in the Lithuanian Province in 1941: The Kaunas District.”, Gaunt, David/Levine, Paul A./Palosuo, Laura(eds.), *Collaboration and Resistance During the Holocaust: Belarus, Estonia, Latvia, Lithuania*, Bern, 2004, pp.283-312.

²⁹ Bubnys, Arūnas, “Die litauischen Hilfspolizeibataillone und der Holocaust.”, Bartusevičius, Vincas(eds.), *Holocaust in Litauen: Krieg, Judenmorde und Kollaboration im Jahre 1941*, Köln/Weimar, 2003, pp.117-131.

³⁰ Sužiedėlis, Saulius/Dieckmann, Christoph, *The Persecution and Mass Murder of Lithuanian Jews During Summer and Fall of 1941: Sources and Analysis*, Vilnius, 2006.

なか、クリストフ・ディークマンがナチス・ドイツ占領期のリトアニアに関する記念碑的な研究書を発表した³¹。1・2巻合わせて1,500ページを超える本書は、①戦争・占領・ユダヤ人大量殺害の関係性、②当時のリトアニアに生きた様々な集団の関係という二つの大きな問いに取り組んでいる³²。このようにユダヤ人大量殺害をナチス・ドイツの戦況や征服・占領政策との関連性の中で分析することで、占領期リトアニアで起きた様々な歴史的事象をより大きな文脈で明らかにし、リトアニアを一つの事例としてホロコースト研究全体に結びつけることを可能にしている。

ディークマンと並びリトアニア語を使いこなす数少ない外国人研究者に、ドイツの歴史家ヨアヒム・タウバーがいる。近年、タウバーはリトアニアに設置された主要なゲットーに関する著書を執筆した³³。そこでは、文書史料や個人の回顧録などからなる膨大な一次史料に基づいて、ゲットーの経済機構としての役割やユダヤ人たちの日常、抵抗といったゲットーの多様な側面を明らかにした。さらに、リトアニアのゲットーにおけるユダヤ人の労働への動員を、近隣諸国のゲットー（リガ、ビャウストク、ベラルーシ）の状況と比較分析するという刺激的な試みも行っている。

さらに、近年では、ナチス・ドイツ側の公式文書やソ連体制期の戦犯裁判の報告書以外の史料の価値にも注目が集まっている。そのような史料で重要かつ広く知られているものとして『ポナリー・ダイアリー』³⁴が挙げられる。『同

胞』でも取り上げられているが、これは、ナチス・ドイツ占領下のリトアニアでポーランド人ジャーナリストのカジミエシュ・サコヴィッツが、ポナリの森で行われた大規模なユダヤ人殺害を目撃し、その様子を記録した日記である³⁵。犠牲者のユダヤ人でも現地住民のリトアニア人でもない、第三者の「観察者」であるポーランド人サコヴィッツによって書かれたこの日記は極めてユニークな記録史料であり、リトアニアにおけるユダヤ人大量殺害の一端を鮮明に伝える史料として長年重要視されている。

ホロコースト研究者デイヴィット・バンキアーは、ライブ・コニュホフスキーコレクションと呼ばれるリトアニアのユダヤ人生存者の証言史料を使った研究を発表している³⁶。この史料は、リトアニアのホロコースト生存者であるユダヤ人コニュホフスキーが終戦直後の1945～1949年にドイツとポーランドのDPキャンプを訪れ、そこに収容されていたリトアニアのユダヤ人に聞き取り調査を行い集められた記録である。この史料の最大の特徴は、リトアニアの地方における証言が集められている点である。バンキアーは、これまでヴィルニウスやカウナスといった大都市と比べて研究の蓄積が少なかった地方や田舎におけるユダヤ人絶滅政策の実態を犠牲者の証言を用いて再構成した。

また、ヴィオレタ・ダヴォリューテは、1990年代以降にアメリカ合衆国ホロコースト記念博物館の下で収集されたインタビュー映像の中からリトアニア現地住民の証言記録を選び出し、それを基にドイツ占領下リトアニアにおける地域

³¹ Dieckmann, a.a.O.

³² Ebd., S.13.

³³ Tauber, Joachim, *Arbeit als Hoffnung. Jüdische Ghettos in Litauen 1941-1944 (Quellen und Darstellungen zur Zeitgeschichte)*, Berlin/Boston, 2015.

³⁴ Sakowicz, Kazimierz, (Arad, Yitzhak ed.), *Ponary Diary 1941-1943: A Bystander's Account of a Mass Murder*, New Haven/London, 2005.

³⁵ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.126.

³⁶ Bankier, David, *Expulsion and Extermination: Holocaust Testimonials from Provincial Lithuania*, Jerusalem, 2011.

社会の暴力 (Communal Violence) や性暴力について分析している³⁷。

日本では、『同胞』の記者である重松尚がリトアニア臨時政府や LAF に関する研究をいくつか発表している³⁸。特に、1930年代リトアニア商工業界の経済団体が発行していた新聞『ヴェルスラス (Verslas)』の中の反ユダヤ主義的言説を分析した論文は、リトアニアの経済界において、ユダヤ人は単なる経済的競争相手ではなく、言語や習慣等の様々な観点から嫌悪され、迫害されて当然な存在だとみなされていた点を明らかにしている³⁹。

さらに、最近日本で刊行された研究書も注目に値する。リトアニア人研究者シモナス・ストレルツォーバスの研究書と、フランス文化・ユダヤ研究専門の菅野賢治による研究書⁴⁰である。この二冊は、杉原千畝の「命のヴィザ」伝説を批判的に再検討し難民問題を実証的に分析した研究書であり、ホロコーストを主題として扱っているわけではない。特に、菅野の研究書は、使っている史料や分析対象を見ても、ユダヤ史に比重が置かれているが、同書の序盤では両大戦間期リトアニアにおける様々な民族集団間の複雑な関係を詳細に議論している⁴¹。こうした、両大戦間期の東欧諸国の複雑な民族的・政治的・対外的状況は、その後勃発する第二次世界大戦やホロコーストの経験と無関係ではない。むしろ、ホロコーストがナチス・ドイツの反ユダヤ政策からだけでは決して理解できないその背景を捉えるためにも、それ以前の

情勢の把握は重要であり、そうした点から上記の二冊は一読の価値がある。

以上、リトアニアのホロコーストをめぐる歴史認識問題と研究史および近年の研究動向について論じてきた。ソ連史観やリトアニア政府が推し進める歴史観からの脱却を図り、史料に基づいて実証的に自国の対独協力を検討するという点では、『同胞』の内容とこれまでの研究動向は重なる部分が多い。一方で、今日のリトアニア社会における歴史認識問題に取り組むために、「敵」と対話しながらユダヤ人殺害現場を実際に訪れ、直接住民の声を聞くというのは、極めて新鮮かつ独特な方法といえる。こうした点を踏まえ、次章では、研究史における『同胞』の位置付けや意義、新規性などについて詳しく考察していく。

2. 『同胞』の評価と位置付け

初めに、本書の構成と内容を簡単に整理した後、本書がリトアニア社会に与えた影響を踏まえつつ、意義や批判点について検討する。

2-1. 構成と内容

本書『同胞』は大きく二部構成となっている。第1部「闇への旅」では、ヴァナガイテが独自に行ったアーカイブ史料の調査や研究を基に、様々なレベルでユダヤ人絶滅政策に関わったリトアニア現地住民が取り上げられる。調査の対象となっているアクターは、LAF やリトアニア臨時政府の政治家たち (第三章) から民族

³⁷ Davoliūtė, Violeta, “The Gaze of the Implicated Subject: Non-Jewish Testimony to Communal Violence during the German Occupation of Lithuania.”, *East European Politics and Societies: and Cultures*, 2022, <https://doi.org/10.1177/08883254211070852> [2022年9月29日最終閲覧]; Davoliūtė, Violeta, “Local Testimony and the (Un) Silencing of Sexual Violence in Lithuania under German Occupation during WWII.”, *Humanities*, 10(4), 2021, <https://doi.org/10.3390/h10040129> [2022年9月29日最終閲覧]

³⁸ 例えば、重松尚「第12章 リトアニア臨時政府 (1941年) — 「抵抗」の歴史とその記憶」橋本、前掲書、pp.173-194.

³⁹ 重松尚「1930年代末リトアニアにおける反ユダヤ主義——リトアニア人実業連合の新聞『ヴェルスラス』の分析を中心に——」『東欧史研究』第39号、2017年、pp.40-63.

⁴⁰ スترلツォーバス、前掲書；菅野、前掲書。

⁴¹ 菅野、前掲書、例えば pp.57-64.

労働防衛大隊 (Tautinio darbo apsauga、以下 TDA)⁴² やハーマン機動部隊 (Rollkommando Hamann)⁴³ の隊員 (第四章)、いわゆる「普通」の現地住民 (第五章) と幅広い。さらに「協力者」だけでなく、当時ユダヤ人殺害の現場を目撃していた子どもたち (第二章) やユダヤ人を救った人々 (第六章) の証言も紹介されている。

そして、第2部「敵との旅」では、2015年にヴァナガイテとズロフが、リトアニア国内に点在するユダヤ人殺害の現場や町 (計14ヶ所) を共に巡った「旅」の経過とそこで行われた両者の会話の内容がまとめられている。なお、殺害現場の跡地は、未だ調査や研究が十分でない地方の中小都市の中から選ばれている。各都市の「旅」ごとに、ドイツ占領期の状況やユダヤ人殺害の過程が史料に基づいて説明されているが、現在と戦時中の状況を並べて示すことで、その都市におけるユダヤ人コミュニティのほぼ完全な消滅という悲劇が一層強調される構成となっている。

2-2. 意義と批判・疑問点

ここで、本書の意義と批判点について検討する前に言及しておきたいのは、本書『同胞』は専門的な学術書ではなく、幅広い読者層が手に取ることができる一般書としての性格が強いという点である⁴⁴。本書、特に第1部では、ある研究対象が細かく分析され、その分析結果に対する著者独自の「議論」や「主張」が行われているというよりは、著者が抱いた疑問に関連する様々な史料や歴史家・研究者の見解が「提示」されるという形をとっている。著者ヴァナガイテがホロコースト研究の専門家ではない点

も踏まえれば、事実関係の正否を細かく批判したり、議論の不十分さを逐一指摘するのは不適切であろう。それ以上に、この本が提起した新たな論点やホロコースト研究史及びリトアニア社会にとっての意義や今後の課題を考察する方がより有益だと考えられるため、そうした点に注意しつつ議論を進めたい。

まず、本書の大きな意義を見出せる要素として以下の四点が挙げられる。

一つ目は、本書最大の特徴であるが、ホロコーストとリトアニア社会の「居心地の悪い」関係性に対して自国の作家自らが声を上げたという点である。さらに、この本が専門家ではなく、ヴァナガイテ自身が自らをそう称しているように「どこにでもいる普通のリトアニア人」⁴⁵によって書かれたことの意義は極めて大きい。本稿第一章で示したように、これまでも自国のホロコーストとの関わりや加害の歴史について取り組んできたリトアニア人歴史家や研究者は多く存在する。しかし、これまで問題だったのは、ズロフが本書で的確に指摘しているように、「リトアニアの歴史家の学術研究で書かれていることと、リトアニア社会の大半の人たちが知っていることのあいだには、大きなずれ」⁴⁶があるという点であった。国内の研究者がどれだけ詳細にホロコーストについて研究を進めても、関心を集め多くの人に読まれなければ、一般社会のホロコーストに関する知識は更新されず、自国のホロコーストへの関与に対する自己反省的な認識も生まれてくることはない。しかし、本書は、わかりやすい簡潔な文章、読者を動揺させ感情を揺さぶるような様々な史料と証言記録、二人の著者の挑戦的な会話が効果的に構

⁴² 1941年6月28日にドイツ現地当局の容認の下設置されたリトアニアの軍事組織。

⁴³ 親衛隊少将ヴォルター・シュターレッカーの命令の下編成された部隊で、親衛隊中尉ヨヒム・ハーマンが指揮を務めた。このハーマン機動部隊は、リトアニア各地におけるユダヤ人大量殺害で中心的な役割を果たした。

⁴⁴ 同様の指摘として以下を参照。Pukelytė, Ina, "Political Influence on Theatre Historiography: Jewish Memory Topics in Lithuania.", *Nordic Theatre Studies*, 31(2), 2019, p.44.

⁴⁵ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.15.

⁴⁶ 同上、p.334.

成されることによって、誰にとっても読みやすくかつ刺激的な内容の著書となっている。このような「一般書」としての利点が大きく働き、本書はリトアニア社会の幅広い層に読まれる結果となった。本稿はじめにで言及した様に、大きな反響とともに複数の方面から厳しい批判があったことは否定できないが、そのことは本書の価値を減ずることにはならない。むしろ、「読まれなければ影響を与えることはできない」という最初の難関を大幅に乗り越えた本書は、これまで広がる一方だった学术界と一般社会との溝を埋める重要なきっかけを与えることに成功したと言えるだろう。

二つ目は、ナチス・ドイツ占領期リトアニアにおいて様々な領域の「対独協力者」について検討されている点である。第一章で挙げた先行研究の中でもホロコーストの「協力者」を扱った研究は多いが、いくつかの包括的な著書を除けば、ある特定の現地組織や社会層の人々に焦点を絞ったものがほとんどである。もちろんそこでは、一つの組織や部隊への詳細な分析と深い考察が行われているわけだが、リトアニア社会によるユダヤ人殺害への関与・協力の全体像が見えにくいという問題点もある。そのため、本書が、間接的にユダヤ人迫害に関与した LAF や、実際にユダヤ人殺害に参加した直接的「協力者」としての TDA 隊員など、アクターを幅広く調査対象としている点は高く評価できる。

そのなかでも特に、政治家や部隊の隊員でないリトアニアの一般住民が、殺害後押収されたユダヤ人の貴重品や財産を横領していた点に言及している第五章「得をしたリトアニア」は、分量は少ないものの、極めて重要な論点を

提起している。リトアニアではこれまで、組織や部隊に所属していた人々へは大きな焦点が当てられてきたが、いわゆる「普通」のリトアニア住民の行動や彼らのユダヤ人殺害への反応は十分に分析されてきたとは言えない。第五章で示されるような、経済的動機に基づいた地域社会全体によるユダヤ人財産の押収や略奪は、対独協力を考える上で見落としてはならない要素である。同様の問題は、他の東欧諸国においても重要なテーマである⁴⁷。

三つ目は、第2部「敵との旅」で行われるヴァナガイテとズロフの会話が、ホロコーストの犠牲者と加害者が互いに歩み寄り共通の理解または「和解」に至ることがいかに難しいかを読者に強烈に突き付けているという点である。14ヶ所の都市をめぐる旅の中で、犠牲者と加害者の人数や、「協力者」の動機、責任追及の必要性、リトアニア社会全体の無関心の原因を議論するなかで、二人が同意に達する場面は限りなく少ない。もちろん、意見の衝突だけでなく、互いへの理解や自己反省的な態度も所々で見られる。しかし、旅を終え二人が別れる際にズロフが放った、「(リトアニアが犠牲者を記憶し過去に向き合う時、) 殺された私たちの同胞は、あなたがたの同胞になるんです——あなたがたの同胞はけっして私たちの同胞にはなりませんけどね」⁴⁸という言葉は一筋縄ではいかない歴史認識問題の厳しい現実を表している⁴⁹。このように本書は、ホロコーストの犠牲者と加害者の間の対立・緊張関係は、両者による対話が行われさえすれば必ず解決するなどといった生易しいものではなく、個人の感情やお互いが帰属する社会の歴史認識と深く絡まり合った恐ろしいほどに複雑な問題であることを、著者同

⁴⁷ ポーランドについては、例えば、フェリクス・ティフ、阪東宏訳『ポーランドのユダヤ人——歴史・文化・ホロコースト』みすず書房、2006年。

⁴⁸ ヴァナガイテ／ズロフ、前掲書、p.398。

⁴⁹ 同様の指摘として以下を参照。Shafir, Michael, “Book Review: *Our People: Discovering Lithuania's Hidden Holocaust*,” *Israel Journal of Foreign Affairs*, 14(3), 2020, p.525.

士の会話で示しているという点で非常に説得的かつユニークである。

四つ目は、旅の途中で出会う町の人々や郷土博物館の職員らが持つホロコーストやリトアニア現地住民の加担に対する意見や認識を読者が知ることができるという点である。数十年前に記録された古い史料を使い歴史的事象を研究することは重要であるが、現代社会の歴史認識問題に取り組むには、今現在リトアニアに住む人々が過去をどのように記憶・認識・評価しているかを知る必要がある。例えば、リトアニア東部に位置する街シュヴェンチョニースの郷土博物館の責任者が、著者にホロコーストについて尋ねられた時に返した言葉は印象的である。彼女は、「ほかにいろいろな問題はあるのに、どうしていつもその問題ばかり調べられるんでしょう。私たちは、ユダヤ人の問題だけでなく、私たちが受けた損害についても調べなければいけません」と答え、住民たちにとっては切実な問題ではないと述べる⁵⁰。これは、決して彼女がナショナリスティックな人間で犠牲者への共感に乏しいなどという個人の問題ではない。リトアニア社会では依然としてホロコーストと自国の関係に対する無関心や自国民の被害への集中という態度が強いということを理解しなければならない。このような現状を知るという点で、二人の著者が旅の途中で出会う様々な住民の生の声は非常に貴重な分析対象となり得る。

以上、本書がリトアニアのホロコースト研究や歴史認識問題に対して提起している重要な視座・論点について論じてきたが、批判点や疑問がないわけではない。

まず、本書での史料の扱われ方は大いに批判的に見る必要がある。本書冒頭でヴァナガイ

テがリトアニア人によって語られ、記録され、研究された史資料のみを使うというルールを自らに課した通りに、本書では様々なリトアニア人側の一次史料が参照され、引用されている。しかし、そこで使われる史料が誰にどのように収集・作成されたのか、その史料を使うメリットと注意点は何かについては十分に検討されていない。特に本書では、1941年から1990年の社会主義時代の資料を保管しているリトアニア特別文書館所蔵の裁判記録や調書が多く参照されているが、訳者も指摘しているように、ソヴィエト時代に当局によって作成された文書を十分な史料批判なしに使うことは安易だと言わざるを得ない⁵¹。なお、この問題点を補うために、日本語版の本書では、訳者によって引用元の史料及びインタビュー証言が徹底的に参照され、原著の誤りの修正や再構成がなされている⁵²。より信頼できる内容を読者が手にすることができるのは、こうした訳者の膨大な作業によるところが極めて大きい。

次に、本書全体を通して、今日のリトアニア社会に住むユダヤ人コミュニティ側の声や視点が十分に議論されていない点が指摘できる。第2部のヴァナガイテとズロフによる「敵との旅」で、読者はホロコーストの歴史を現在の人々がどう認識しているかを、住民の実際の発言を通して知ることができる。しかし、著者二人が出会い、話を聞く人々のほとんどはリトアニア人住民で、本書における「ユダヤ人」側の見解のほとんどはイスラエル在住のズロフの発言である。こうしたアンバランスさを補うために、「訳者解題」でリトアニアのユダヤ人コミュニティ代表の声明や立場が紹介されているが⁵³、ユダヤ人住民一人一人の意見というのは不透明なままである。リトアニア人住民の中で、どこにある

⁵⁰ ヴァナガイ／ズロフ、前掲書、pp.258-259.

⁵¹ 同上、p.450.

⁵² 同上、p.450.

⁵³ 同上、pp.445-447.

か定かではないユダヤ人の殺害現場探しを手伝ってくれる老人もいれば、ホロコーストはリトアニア人にとって切実な問題ではないと主張する博物館職員がいるように、ユダヤ人コミュニティ内の意見も一様ではあり得ない。現在リトアニアに住むユダヤ人住民の実際の言葉を通して、リトアニア政府による歴史政策やホロコーストの記憶のされ方に対する彼らの態度や立場が紹介されれば、歴史認識の現状がより鮮明に見えてくるのではないだろうか。

おわりに

本書『同胞』は、リトアニアのホロコースト研究と現代社会における歴史認識問題の両方の領域において重要な論点と視座を提示することに成功した。

ホロコースト研究にとっては、非ドイツ人・非ユダヤ人である現地住民への注目と、彼らのユダヤ人絶滅政策への関与と協力が社会の幅広い層に見られた事実を多様な史料によって明らかにした点が重要である。特に、日本についていえば、東欧諸国の現地住民によるユダヤ人絶滅政策への関わりを主要なテーマとして一冊全体で詳細に扱ったものはおそらく本書が初めてであり、日本のホロコースト研究界にとっても新規性あふれる一冊であるといえるだろう。

今日のリトアニア社会には、さらに深刻かつ挑戦的なインパクトを与えた。著者二人による「敵との旅」は、犠牲者心理に強く基づいた歴史認識がはらむ問題性とリトアニア社会に広がる自国の加害の歴史と犠牲者に対する無関心な態度を浮き彫りにした。これにより、戦後約70年たった今も加害者と犠牲者との間の歴史認識には大きなズレがあり、双方による平和的な対話がいかに困難なプロセスであるかが国内外に示されることとなった。

今後の大きな課題は、これまで蓄積された専

門的な学術研究の成果を、リトアニアの一般社会にどれだけ還元できるかという点であろう。著者ヴァナガイテはすでに、ホロコーストの歴史における学界と一般社会の乖離というこの問題点について取り組んでいる。2021年刊行の『それはいかにして起きたか——ホロコーストを理解する』⁵⁴では、ヴァナガイテの質問に専門家であるディークマンが答えるという対話形式で、リトアニアのホロコーストについて一般読者にとってもわかりやすかつ学術的にも信頼できる説明と議論の提示が試みられている。

一般書であるがゆえの学術的不十分さ是否定できないが、これまでリトアニア社会が避けてきたテーマに挑んだ著者の強い問題意識は高く評価されるべきであろう。「過去」の歴史的事象と「現在」の歴史認識・記憶の問題の両方を一冊で概観できるユニークさと、提示された視座や論点の新規性を踏まえれば、東欧諸国のホロコースト及び歴史認識に関する研究・議論における本書の重要性は極めて大きい。

⁵⁴ Dieckmann, Christoph/Vanagaitė, Rūta, *How Did It Happen?: Understanding the Holocaust*, Lanham, 2021.